

平成 29 年度

結の故郷づくり交付金事業

各地区実施報告書



平成 30 年 7 月

大 野 市

目 次

1	大野地区各種団体連絡協議会	1
2	下庄をよくする会	8
3	乾側をよくする会	14
4	小山をよくする会	18
5	上庄地区各種団体協議会	24
6	富田地区むらづくり運動推進協議会	27
7	食育のふるさと阪谷をよくする会	33
8	五箇地区むらづくり推進協議会	38
9	和泉自治会	43

大野地区各種団体連絡協議会

1 基本データ

- 地区名 大野地区
- 地区人口 13,621 人 (H30.1.1 現在)
- 世帯数 5,154 世帯
- 面積 6.3 km²
- 地区の沿革

大野地区は、大野盆地の北西部の平坦地に位置し、東は上庄地区、南は小山地区と上庄地区、西は乾側地区と小山地区、北は下庄地区に接し、政治・経済ともに大野市の中心である。

古代より中世初期にかけては、政治経済の中心は小山地区や乾側地区にあり、大野地区は荒涼とした原野に数村が所在していたと考えられている。

中世中期には、亥山城（現在の日吉神社付近）の周辺に小規模な城下町が形成されていたが、今から 400 年以上前、天正期に金森長近が大野城を築城し、新しく建設した城下町が、大野地区中心部の街区や用排水路の原型となっている。

明治 4 年の廃藩置県により大野藩は大野県となったが、その年のうちに福井県、足羽県とめまぐるしく変わった。県名はその



亀山の頂に建つ越前大野城

後も明治 6 年に敦賀県、明治 9 年に石川県と変遷したが、明治 14 年に再び福井県となり現在に至っている。

足羽県地理誌によると、廃藩置県当時の大野地区は戸数 2,083 戸、人口 9,052 人であった。



亀山から見た市街地

明治 22 年の町村制施行により、5 つの小区がまとまって大野町が誕生した。大野町は、昭和 29 年の町村合併により大野市の一地区となっている。

○実施主体

大野地区各種団体連絡協議会

2 現状と課題

大野地区は 73 の行政区から成り、地理的要件や歴史的背景から大きく 6 つの地区に分かれている。まちづくりの取り組みは大野地区全体だけでなく、6 地区それぞれにおいても地域性を反映し進められている。

そのため大野地区全体で共通した目標を掲げ、まちづくりに取り組むことについては、地域により温度差があるのが実情となっている。

3 事業の内容

平成28年に結の故郷づくり交付金事業実施要綱が改正され、交付金の対象となる事業実施主体が、公民館区域を単位とする地域づくり団体のほか、市が設置する公民館の区域を単位とする社会教育関係団体及び自治会に拡大されたことから、平成29年度は大野地区各種団体連絡協議会において交付金の活用方法を検討することとなった。

大野地区各種団体連絡協議会構成団体

大野地区区長会、大野地区まちづくり推進協議会、大野地区体育協会、大野長生会、大野地区子ども会育成会連絡協議会、大野地区社会福祉協議会

大野地区各種団体連絡協議会において活用方法について話し合いを行い、大野地区区長会、大野地区体育協会、大野長生会が交付金事業に取り組むこととなった。なお大野地区区長会については、それぞれの地区における課題解決に活用したいとの声があがり、第1地区から第6地区までそれぞれが事業に取り組むこととなった。

【第1地区】

『南っこイルミネーション』

第1地区内の春日神社において行われる良縁の樹のイルミネーション事業「縁のあかり」に合わせ、有終南小学校の周囲でもイルミネーションを点灯し、地域のにぎわいとイベントとの相乗効果を狙い事業を行った。

事業を行うにあたり「縁のあかり」主催者の『カスガ良縁団』、イルミネーションの設置場所となる有終南小学校へ許可や協力を呼び

かけ、その結果、10月1日の点灯式を一連のイベントとして行うこととなった。

設置作業は、有終南小学校PTA、区長会、まちづくり委員会が共同で行い、地区住民と子どもたち、その保護者らがお互いに協力しながら行った。

点灯式では、有終南小学校から春日神社まで子どもたちが練り歩き、春日商店街に設置



設置作業

された行灯に順番に明かりを灯し、最後に良縁の樹のイルミネーションを全員で点灯する例年になく大掛かりなものとなった。

これらの取り組みは報道機関にも取り上げていただき、地域の宝である良縁の樹を広くアピールすることにつながったほか、一連の作業を通じて地域住民同士が交流を深めることとなった。



『縁のあかり』点灯式

【第2地区】

『大野第2地区防災活動一斉行動日』

地域全体の防災意識の醸成・向上を図るため10月1日を防災活動一斉行動日とし、第二地区の全町内会（9地区）が、それぞれの特性に応じた防災活動を一斉に実施した。

ハザードマップ作りや避難訓練、消火訓練、土嚢作りやAED講習など、地区の特性に合



訓練の様子

わせ、さまざまなメニューに取り組み、防災意識の高揚を図った。

また地区内の児童養護施設と協働で防災訓練を行う地区があったなど、単一行政区ではなく地区全体で一斉に取り組むことで、比較的規模の大きな訓練を行うことができた。

さらには今回の訓練を契機に自主防災会を結成した地区や、防災防犯課の協力を得ながら防災資機材の整備に着手した地区など、地域全体で防災をテーマに活動したことが、さ

まざまな内容へとつながった。

【第3地区】

『大野第3地区 住民交流輪投げ大会』

第3地区は昭和20年代から50年代にかけ住宅街としてそれぞれの町内会が出来たが、若返りする世帯が少なく、高齢者のみや一人暮らし高齢者の世帯が多くなっている。

そのため住民同士が交流する機会やスポーツへ参加する機会が少なくなっており、誰も



輪投げの講習会



輪投げ大会

ができるゲーム感覚のスポーツを実施することにより住民同士の交流を図ろうと輪投げ大会を企画した。

各町内会で公式輪投げの説明会と練習を行い、最後に10町内会が集まって本大会を開催した。

輪投げは初めてという町内が多かったため、公式輪投げのやり方などについて、大野市スポーツ推進員から指導を受けた。最初に区長を対象とした説明会と練習を行い、その後に各町内において説明会と練習を行い大会に向けて腕を磨いた。大会には全町内会から135人が参加し、3ゲームの合計得点を競い合いながら交流を深めた。

【第4地区】

『大野第4地区 高齢者お楽しみ会』

普段、家に引きこもりがちな高齢者に外へ出てもらい、お互いの交流を深めてもらうことや、近所に住んでいてもなかなか顔を合わさない人たちへお互いの現況を確認し合う機械を提供することなどを目的に実施した。

お楽しみ会の開催にあたり、事前に手持ちの太鼓（パコーン）づくりのワークショップを行い、当日それを持ち寄って出演者と一緒に演奏できるようにした。

会場入り口前には、昭和38年2月の福井新聞の雪害記事が並べられたほか、会場内では、昭和30年代の懐かしのニュース映画『福井新聞ニュース』が上映され、当事の世相が色濃く反映された映像を懐かしそうに眺めていた。



昭和38年の雪害記事

その後、佑雅秀喜代会（ゆうがひできよかい）の民謡に続き、祥雲太鼓（しょううんだいこ）の演奏が行われ、事前に作成したパコーン（太鼓）を一緒にたたき、会場が一体となって盛り上がるなど、集まった参加者らが楽しいひと時を過ごしていた。



祥雲太鼓の演奏

【第5地区】

『大野第5地区 防災活動』

大野第5地区では、8月6日の大野市総合防災訓練で学びの里「めいりん」を会場に避難訓練が行われることに合わせ、地域の防災



防災マップづくりワークショップ

意識の高揚を図ろうと、防災ハザードマップ作りを行った。

防災防犯課の協力のもと、市の防災アドバイザーに就任いただいている京都大学防災研究所より講師を招き、どのような点に注意すべきかをワークショップで学びながら、地域の特徴を反映したマップ案を作成した。

事前にワークショップを開催した効果もあり避難訓練当日は多数の参加があり、それぞれの地区で住民の防災意識向上が図られた。

その後、区長が話し合いを重ね、消火器や消火栓の位置、一時避難場所や避難経路、注意すべき空き家など、地区ごとの実情や特徴を反映した独自の防災マップを作り住民へ配布した。



防災マップの例

【第6地区】

『大野第6地区 カレンダーづくり』

大野第6地区では「大野市内の四季折々の風景写真や絵画など」地域が誇る景観をもとにカレンダーを作成した。

作成したカレンダーは、第6地区の各戸へ配布し、地域住民に大野の素晴らしさを改めて実感してもらった。

風景写真や絵画は、現在・過去を問わず募集し、六間通りの突き当たりに旧有終西小学校が映っている懐かしい写真や、おおの踊り



旧有終西小学校の写真

や雪見灯籠のなど大野の四季折々の風景が集まった。

カレンダーは、平成30年4月～平成31年3月のカレンダーを作成した。



【大野地区体育協会】

『大野地区体協活性化事業』

球技大会や体育大会など、地区事業の参加者数に減少傾向がみられる中、スポーツを通じた地域の活性化に向け、どのように取り組むかを考えながら事業を行った。

大野地区体育大会の内容を検討する中で、子どもから大人まで、誰もが参加しやすい種目を新たに追加しようと「なわとびリレー」を行った。各チームから、一般男女、小学生男女、40歳以上男子の5名がエントリーし、



なわとびリレーの様子

びよんびよん跳ねながらフィールドを駆ける姿に会場から大きな声援が送られていた。

また、スポーツを通じた地域の活性化を話し合う中で、平成30年に開催される福井国



講演会の様子

体を、ひとつの契機とし地域の盛り上げに活用しようと、平成29年に行われた自転車競技プレ大会で優勝した福井県選手、中島康晴氏を招き講演会を開催した。

また会場内では国体推進課の協力を得て、自転車競技やパワーリフティング、カヌーの体験コーナーや、ちびっこ相撲の体験など地元で開催される競技をアピールする場が設けられ、大会に向け機運を高めるよい機会となった。

平成30年は大野地区体育協会が創立70周年の節目を迎えることもあり、地元での国



ちびっこ相撲の様子

体開催と合わせ、スポーツを通じた地域の活性化に貢献できるよう、引き続き取り組んで行きたい。

【大野長生会】

『大野地区交流ウォーキング大会』

大野長生会では、有志がウォーキングクラブを設立し、気候のよい時期にウォーキングを楽しんでいる。

その楽しさをより多くの人に知ってもらい幅広い年代で交流を図ろうと、大野長生会においてウォーキングイベントを開催することとした。

大野地区体育協会、大野地区社会福祉協議会など他団体へも参加を呼びかけたほか、小学校へチラシを配布するなど、広くイベントへの参加を呼びかけた。

コースは自動車の交通量を考慮しショッピングモールVIO駐車場から黒谷観音までの往復約5キロとした。また揃いのビブスを着用しドライバーからの視認性を高めるなど、交通安全に配慮し行った。

当日は天候に恵まれ約50名が参加。準備体操に続き、講師から歩き方のポイントを教わりウォーキングを開始した。

途中、何度か休憩を挟みながら、無事に目



ウォーキングの様子

地的の黒谷観音へ到着、住職より麦茶や軽食の差し入れを頂戴し恐縮しながら乾いたのどを潤した。体力に自信のある人は休憩時間を利用し、黒谷観音の裏の八十八ヶ所巡りコースも歩いていた。参加者は自身の体調や体力に合わせ思い思いに楽しんだ。



黒谷観音で記念撮影

4 事業の成果

今年度、各種団体連絡協議会において交付金事業に取り組んだことにより、各団体が現況や課題などを整理することにつながった。

大野地区体育協会や大野長生会においては、会員同士の事業開催に向けた話し合いを通じて、課題の共有や会員間の交流がこれまで以上に図られ、地域コミュニティの活性化につながった。

区長会においては第1～第6の各地区で事

業を行ったことにより、それぞれの区長同士が集まる機会が増え、身近なところから、自らの手で行う地域づくりを実践することとなった。

また単一行政区ではなく、いくつもの地区がまとまって事業を行ったことで、より規模の大きい取り組みが可能となったほか、地区同士が事業に関する情報交換を行ったことにより内容の充実が図られるなど、地区で共通して目標に取り組むことによるメリットが活かされることとなった。

5 今後の展望

今年度は、各種団体連絡協議会で初となる取り組みであったことから、どの団体も手探りで事業を行っていた。来年度はこの経験をもとに更なる内容の充実や新たな取り組みへとつなげたい。

平成30年度には、大野地区体育協会が創立70周年を、大野長生会は創立60周年を迎える。この節目を契機として、よりいっそう地域コミュニティの強化へ取り組んでいきたい。

さらに大野地区においては、第1地区から第6地区まで、それぞれの地区がそれぞれの取り組みで地域コミュニティの活性化を進めており、その活動からお互いに刺激を受けながら、やがては地区全体の活性化へとつながっていくことが期待される。

下庄をよくする会

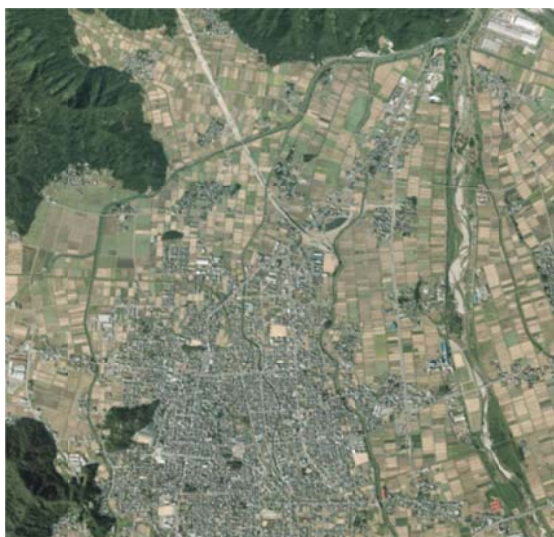
1 基本データ

- 地区名 下庄地区
- 人口 8,602人 (H30.1.1現在)
- 世帯数 2,893世帯
- 面積 約19.1km²
- 地区の沿革

下庄地区は大野市の北西部に位置し、勝山市に隣接している。昭和29年に2町6ヵ村が合併して大野市が誕生した時に、下庄町も大野市に編入された。

地区内には、国の九頭竜川ダム総合管理事務所や県の奥越土木事務所、奥越合同庁舎のほか、ビュークリーンおくえつ、奥越明成高等学校、大野警察署、大野郵便局等の官公庁等が集中しており、国道沿いには複数の郊外商業施設も進出している。また、中部縦貫自動車道の大野ICも当地区に設置され、平成25年3月24日から供用されており、国道157号の大野バイパス(東縦貫線)と併せて、市の東の玄関口としての整備が着実に進捗してきている。

- 実施主体 下庄をよくする会



下庄地区の航空写真：農村地域と市街地が混在している

2 現状と課題

下庄をよくする会では、昭和54年の発足以来住民主体のまちづくり運動の推進に努めてきた。本年度で30回を数える下庄まつりは地区内の各種団体が参加し、地区を挙げての行事となっている。毎年多くの来場者でにぎわい、地区民の交流促進、団結力の強化、地区の活性化に大きな成果を上げている。

また、地区内の一人暮らし、二人暮らしの高齢者宅に手打ちそばを届ける「まごころそばサービス」や河川や山際の環境パトロールなどの環境美化活動など、その活動は多方面にわたり、その活動に対し、数々の表彰を受けている。



花のまちづくりコンクール賞表彰式

これらの活動を支えるのは、地区内の各種団体から選出される委員と33地区から推薦される地区推進委員、そして会の趣旨に賛同するまちづくり運動協力者からなる約90名の委員である。しかし、まちづくり活動への意識には差があり、一部の委員に活動が偏りがちとなっている。

また、長く活動をけん引してきた役員も年齢を重ね、より若い年齢層への世代交代が思うように進んでいない現状がある。

こうした中、若い世代の地域づくり活動への参加を促すため、地区内の自然や史跡などの地域資源を活用しながら、自らも楽しめるような事業を企画、実施しようという趣旨に賛同する若者たちが集まって活動を始めた「しもしょう

を楽しむプロジェクト」も5年目を迎えたが、下庄地区の今後を担う後継者として育成するため、彼らが活動しやすい環境づくりを含め、引き続き支援をしていく必要がある。

また、地場産野菜の販路拡大と地区民の交流の場として、平成23年度にオープンした「下庄青空市」は7年目を迎え、地域に定着した新鮮朝市として賑わっている。周辺住民など固定客も増えてきたが、まだまだ出品登録者数が少なく、季節によっては品揃えが十分でないこともあり、経営の安定化とさらなるにぎわいを創出するため、誰でも気軽に参加できる直売所として、さらに出品登録者を増やすことが懸案となっている。



下庄青空市のにぎわい

3 事業の内容

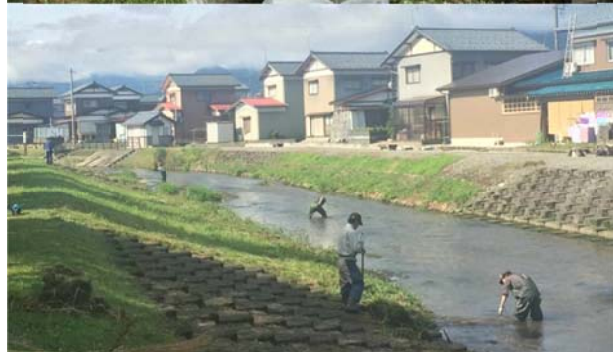
【後継者の育成：『しもしょうを楽しむプロジェクト』の取り組み】

5年目を迎えた『しもしょうを楽しむプロジェクト』の活動も、活動する会員が固定化してきていることもあり、本年は会員の増強に努めることとした。主催事業である『水の恵みに感謝し、身近な水環境に関心を持ってもらうことを目的とした「みずかわ感謝祭」』は、木瓜川清掃をするクリーン作戦と恒例のダックレースのみとした。

下庄地区は水資源に恵まれた地域であることを再認識し、この水の恵みに感謝し、身近な水環境に関心を持ってもらうことを主眼に置き、住民参加型のイベントとなるよう取り組んだ。

下庄地区のまちづくりをけん引する下庄をよくする会だけでなく、地域の学校との連携により、下庄をよくする会の委員や陽明中学校の生徒が多数運営スタッフとして参加し、地域が一体となったイベントになった。

①木瓜川クリーン作戦(7月9日(日)午前8時～11時30分)



木瓜川クリーン作戦(7月9日)

ダックレース会場となる三角公園(月美町)からフォレストタウン(東中野)までの木瓜川流域で、陽明中学校生徒や一般ボランティアなども加わり、川の中や堤防のゴミ拾い、草刈りを行った。

③木瓜川ダックレース(7月30日(日)午前10時30分～正午)

木瓜川に背番号をつけた約350羽のあひるのおもちゃを放流し、着順を競った。事前にエントリー券を販売し、参加者らは自分のダックを追いかけてながら川に沿ってゴールまで移動した。



表彰式は河川敷で行った。

④下庄キャンドルナイト(1月26日(金)午後5時～7時)

下庄小学校のふるさと教育の授業にしもプロ会員が招かれて、3、4年生に活動を紹介

したことがきっかけとなり始めたこのイベントも、3年目を迎えることになった。

今回は、児童たちの地域活性化のためのイベントを行いたいという思いを尊重し、しもプロのメンバーは裏方としてイベントを支える役割を担うこととした。



【しもプロとしもキッズの合同企画会議】

灯りは、しもキッズ手作りのエコキャンドルやLED電球など約2,000個を準備した。

午前中にしもプロメンバーが下準備をし、午後から、しもプロとしもキッズ、そして保護者も参加して会場を装飾した。



オープニングセレモニーはしもキッズが中心となり、替え歌やハピネスダンス、光る棒など児童による趣向を凝らした演出が行われ、非常に盛り上がった。



夕方からキャンドルに点灯し、幻想的な明かりが会場を彩った。

【「下庄の昔ばなし」の活用】

地区内の名所・史跡を紹介する冊子「下庄の名所・史跡」、地域に伝わる昔ばなしをまとめた冊子「下庄の昔ばなし」などを活用し、また、地域資源を理解するため、子どもを対象とした、地域内を巡って名所や史跡に触れ、ふるさとへの愛着と誇りを養うことを目的に、スタンプラリー事業を実施した。

また、各種冊子の製作を契機に、下庄地区をさらに啓発広報するため、「地域の唄」を製作した。

【直売所「下庄青空市」の開催】

6月17日から11月11日までの毎週土曜日に「下庄青空市」を開催した。開催時間は午前8時から午前9時30分までで、お盆には仏花を中心とした朝市も開催した。

地区団体等のイベントでは、使用する農産物を「下庄青空市」で納入するなど、地域との連携も図った。



【下庄まつり記念イベントの開催】

10月15日(日)に、第30回を迎える下庄まつりを記念するステージイベントを開催した。



【まちづくりシンポジウムの開催】

1月23日(火)に、「地域の唄」の製作に協力いただいた霊河秀樹氏を講師に招いて、「縁」を繋いで築くまちづくりというテーマで講演会を実施した。

また、3月3日(土)4日(日)に、まちづくり先進地を訪問し、オリーブを活用した先進的なまちづくりについて研修した。

まちづくり

シンポジウム

(1月23日)



先進地視察

(3月3日)



4 事業の成果

【後継者の育成】

4年目となる水辺の灯りまつりは、イベントだけでなく事前の準備を兼ねた河川清掃(木瓜川クリーン作戦)を実施しており、沿線地域に木瓜川クリーン作戦の実施日に合わせた社会奉仕を同日開催で実施しており、木瓜川の清掃をしながら地区内を移動することで、地域住民にイベントの周知や趣旨の理解を得られるとともに、一緒に清掃活動をするという一体感が生まれたと考える。また、クリーン作戦には下庄をよくする会や下庄倶楽部の会員のほか陽明中学校の生徒など多数のボランティアの参加が得られた。

同じく3年目となる、しもキッズとの共催による「下庄キャンドルナイト」は、実行委員を務める児童たちとの活発な意見交換によりイベントを作り上げることができた。地域の若者グループ「しもプロ」は、子どもたちの熱い思いを実現させるための裏方としてその力を存分に発揮することができた。今後も継続的に事業を実施することで、児童の地域愛が育つことが期待される。

下庄をよくする会が、しもプロの活動に財政面を含めた活動の支援を行っており、しもプロ会員にも地域行事のスタッフとしての参加を呼びかけ、まちづくり活動の若手後継者づくりの一助となっている。

【「ふるさと探訪 下庄の名所・史跡」「下庄の昔ばなし」の活用】

今年度も冊子『ふるさと探訪 下庄の名所・史跡』の活用を図るため、小学生を対象に地域内の名所史跡を廻って学習するスタンプラリーを実施した。

夏休み期間で実施したため、大勢の児童が参加して地域内の名所史跡を訪れ、新たな発見と

ともにふるさとを学ぶ機会を提供することができた。

また、名所史跡のさらなる広報を図るため、「地域の唄」の製作にも取り組んだ。

【直売所「下庄青空市」の開催】

協議会を開催し、下庄青空市のスムーズな運営に向けて意思統一を図るとともに、レジシステムの操作研修を実施し、特定の参加者にレジ業務が偏らないよう、負担軽減を図った。

青空市のオープンにあたっては、下庄をよくする会の機関紙である「下庄しるべ」で広報するなどしたが、告知前からオープン期日の問い合わせが来るなど、地域への周知が浸透してきた。開店時刻前から来店する客も多く、早々と売り切れることもあった。

また、作物の作付け前に栽培講習会を実施するなど、青空市の継続的な開催に向け、品質向上や新たな出品野菜の掘りおこしなどに努めた。

【まちづくりの研修の開催】

これまで継続的に実施してきた下庄まつりも第30回を迎えることから、まつりをより盛り上げ、地域づくりの機運を高めるため、記念のステージイベントを開催してまつりを盛り上げた。

また、「地域の唄」の製作で協力頂いた霊河氏を講師に招き、「ご縁をつないで」と題して、「縁」を繋いで築くまちづくりについて理解を深め、まちづくりへの想いを改め感じることができた。

さらに、まちづくり先進地の視察研修でオーブを活用したまちづくりについて研修し、新たな特産によるまちづくりの可能性について理解を深め、まちづくりへの想いを新たにすることができた。

5 今後の展望

若者グループ「しもプロ」の活動もまだ組織基盤が脆弱であり、事業を継続し、会を存続させていく上でも、会員の増強が緊急の課題であり、会員の勧誘や活動の広報に取り組んでいる。会員も徐々に増えているが、企画段階での参画ができずイベント当日のスタッフ活動のみという会員も多いのが現状となっている。持続的な活動を促すため、会員の自主性を尊重しつつ、「地区内の資源を利用しながら、自らも楽しめるような事業を企画、実施する」という会の趣旨に沿う活動を今後も支援して会員の増強を図り、まちづくり活動への参加も働きかけていく。

地区内の名所・史跡の活用については、今後も積極的に活用するため、学習活動や史跡めぐり、さらなる学習を深めるためのアイテムづくりなど事業展開を継続する。

下庄青空市は、「市」の継続的な開催をめざし、出品野菜の品質向上を図り、新しい品種、珍しい品種の栽培を手掛けていく。また、青空市を利用する客は年齢層が高いためか、目新しい野菜を敬遠しがちであるが、消費者が望む野菜の品質向上と、新しい野菜の掘り起こしにも尽力し、安全で安心な農産物への関心が高いと思われる若い客層に向けた販売を強化する。

乾側をよくする会

1 基本データ

- 地区名 乾側地区
- 地区人口 931人 (H30.1.1 現在)
- 世帯数 333世帯
- 面積 約5.8km²
- 地区の沿革

乾側地区は、市街地の北西部に位置し、地区西端にある花山峠を境に福井市に接し、地区中央の東西を国道158号線が横断しており、大野市の西の玄関口となっている。

8地区からなり戸数約230戸で、酒米と種籾産地として有名な純農村地域である。

- 実施主体 乾側をよくする会

2 現状と課題

乾側地区は縄文時代から人々が住み始め、大野でも最初に開けた場所のひとつである。弥生時代や古墳時代には牛ヶ原を中心に大きな力を持った豪族が現れ、乾側地区内に多くの墓や古墳が作られた。中でも牛ヶ原の山ヶ鼻古墳群には奥越で唯一の前方後円墳があり、鉄剣や貨幣（和同開珎）も見つかっている。なお、大野盆地内の古墳のうち6割以上が乾側地区に集中している。

また、稲作が始まり、奈良時代には寺や貴族・豪族の土地である荘園が発達したが、牛ヶ原の荘園は、奈良時代には奈良東大寺領、平安時代には京都醍醐寺領として、今の大野市街地の北半分にまで広がっていた。その牛原荘には後に牛ヶ原城が築かれ、三社神社が建立された。なお、尾永見区には、稲作に縁の深い雨乞い踊りが無形民俗文化財として継承されている。

さらに、南北朝時代に築かれた戌山城は、金森長近によって越前大野城が築かれるまで、戦国時代の激動期を含め200年余りの間、大野とその周辺地域を治める斯波氏、朝倉氏の居城

として、県内2番目の多さの畝堀数と奥越最大の規模を誇る山城であり、一乗谷城の東方面の軍事拠点として重要な役割を果たしていた。

このように、乾側地区は古来、大野盆地の中でも最も歴史と伝統のある地域であり、その価値と魅力を高めるために、平成22年度から3ヵ年をかけて「みくら清水・戌山城址」及び「牛ヶ原城址・三社神社」の2コースの登山道整備を、平成25年度から28年度にかけて登山道の継続整備を含めた史跡整備に取り組んできた。また、乾側の歴史について関心を深めて貰えるようマンガ調本「乾側歴史ものがたり」の発刊や乾側地区の史跡をマップに図示した「歴史ロマンの郷 乾側」と題した乾側史跡総合案内看板を制作、そしてこれまでに整備してきた史跡やそれ以外にもたくさんある乾側の魅力をより分かりやすく紹介・案内できるようホームページとパンフレットを制作するなど地域の魅力の再確認と情報発信にも取り組んできた。

「住み続けたい、訪れたい、住んでみたい」と思えるような魅力ある地域づくりを行うには、今後、更なる地域資源の洗い直しや掘り起こしを行い、これまでに整備してきた史跡・伝統等を始めとする乾側の魅力を周知・継続発展させていくことに併せて、加速する地域の人口減少問題に対して、いかに取り組んでいくかが最重要課題となってくる。

3 事業の内容

(1) 普及啓発・伝承事業

① 乾側史跡巡りウォーク

開催日時 平成29年10月14日(土)

午前9時～正午

参加者 21人

乾側の歴史や魅力への理解を深めて貰うと同時に健康と交流を目的とした「乾側史跡巡りウォーク」を地区住民を始めとする市内全域を対象に企画した。

乾側公民館に集合した参加者は、天空の城スポット⇒戌山城址⇒みくら清水 ⇒亥山(いやま)城址(日吉神社)⇒小山(こやま)城址(北御門区)の順に徒歩やバスにて移動。途中、史跡ごとに市の学芸員から説明を受けながら、約3時間かけて散策した。



ほたるの里登り口から登山



学芸員による解説(戌山城址主郭跡)

②ホームページの更新とパンフレットの増刷

史跡をはじめとする乾側のたくさんの魅力をもっと分かりやすく紹介して見てもらい、一人でも多くの方に乾側へ足を運んでもらえるようにと、制作した乾側魅力紹介ホームページを更新し、パンフレットを増刷した。



(2) 登山道・史跡整備事業

戌山城址登山道の補修作業

開催日時 平成29年10月7日(土)

午前9時～正午

参加者 22人

戌山城址の登山道については、過去に登山者が登りやすいように整備を行ったが、経年劣化により、登山道があちこちで損傷しているため、乾側をよくする会員を中心に補修作業を行った。なお、登山道の補修作業については、戌山城址と三社神社・牛ヶ原城址を毎年交互に継続して取り組んでいる。



(3) 観光促進事業

乾側レンタサイクル

電車利用の来訪者が様々なスポットに足を運べるよう、無料のレンタサイクルをJR牛ヶ原駅駐輪場内に配備しており、イベント時や普段でも利用者を見かけることがあり、乾側の観光促進の一助となっているようである。

自転車には整備した会の名前をテプラにて明記したが、雨風や日照により劣化が激しいため、「乾側をよくする会」「いぬいかわレンタサイクル」の2つのステッカーを屋外仕様にて整備した。



(4) 地域活力事業

①第2回いぬいかわ夏まつり及び前夜祭

開催日時 平成29年8月11日(金・祝)
12日(土)

来場者数 延べ約280人

昨年に引き続き、第2回いぬいかわ夏まつりを開催。今年度より前夜祭形式にてステージでカラオケ大会も実施した。日程を帰省者の参加を見越してお盆連休にした結果、2日間で述べ約280人の来場者があり、昨年度以上に地域住民同士の交流を図ることができた。

会場内は提灯(電球)と公民館の照明のみで、会場の雰囲気は良かったがステージと出演者が暗すぎて客側からはよく見えなかったため、来年度開催に向けて、ステージ照明を整備した。



②ふれあい乾側歌謡祭

開催日時 平成29年11月26日(日)

来場者数 13人

整備したステージ照明の確認も兼ねて、公民館のカラオケ講座受講者の発表イベントとして「ふれあい乾側歌謡祭」を企画。歌だけでなく楽器の演奏ができる住民にも出演を依頼し、音楽を通じて住民の交流を図った。



4 事業の成果

昨年度に引き続き、再開した夏まつりをさらにパワーアップさせつつ、これまで取り組んできた歴史遺産や史跡を活用した事業も継続して行った。

「普及啓発・伝承事業」としては、地区内外の参加者が乾側の歴史を登山により身を以て体験し、地区の魅力の再確認と発信を図ることができた。また、様々なイベント時や他の施設等にて乾側の魅力発信パンフレット「乾側のトリセツ」を配布し、乾側のみどころや歴史についての周知に努めた。

「登山道・史跡整備事業」としては、戌山城址登山道として「みくら清水登山口」と「ほとるの里丁登山口」があるが、今年度は後者の補修を地域住民とともにに行い、翌週には早速整備した登山口より史跡巡りウォークを実施した。

「観光促進事業」としては、昨年度整備したレンタサイクルの管理と事業の主旨を周知するため、「乾側をよくする会」「いぬいかわレンタサイクル」のステッカーを作成。昨年度の整備時にはテプラにて団体名を明記していたが、日差しや雨等で劣化したため、屋外仕様とした。

「地域活力事業」としては、夏まつりと歌謡祭を開催。夏まつりをお盆連休中に実施した結果、帰省者の参加もあり、初開催の前夜祭も含め昨年度以上となる延べ約280人の来場者数があった。また、こちらも初の試みとなる乾側小学校の5・6年生による出店（水風船釣り、ストラックアウト）は、企画から運営までを子どもたちで行い、当日は大変な賑わいであった。企画運営した子どもたちも、地域の大人と共に夏まつり運営に携わることで、地域住民の交流を通じ地域づくりの心が醸成され、しいては地域に住み続け人口減少対策へとつながると考える。

○活動指標・成果指標の達成状況

・乾側歴史巡りウォークを実施し、地域の歴史的な魅力を再確認した。

参加者21人。

・第2回夏まつりを前夜祭を含めて開催し、2日間で約280人の参加となった。

5 今後の展望

地域の魅力となる素材の掘り起しが進み数が集まってきているため、それぞれの素材の磨き上げとそれを活用した事業展開を模索し、地域住民の活動参加人数の増とさらなる交流を図りたい。合わせて地区外への情報発信にも力を入れ、交流人口の増にもつなげたい。

小山をよくする会

歴史と文化を活用した地域づくり
～ふるさとを誇る住民意識の啓発事業～



赤枠で囲われたところが小山地区

1 基本データ

- 地区名 小山地区
- 地区人口 1, 967人 (H30.1.1 現在)
- 世帯数 646世帯
- 面積 約43.4km²

小山地区は、15の集落で構成される緑豊かで自然にあふれた農村地域である。

面積は、東西2キロメートル、南北4キロメートルの約8平方キロメートル。その位置は、大野市の南西部、市街地に隣接し、大型ショッピングセンターなどの商業施設が立地している。

その歴史は古く、地区内を南北に縦断する赤根川流域を中心に縄文時代から人が住み着いており、大きな勢力を持っていたと思われる豪族の古墳がいくつも存在している。

平安時代には藤原氏の荘園となり、その後、京都の春日大社と深い繋がりを持ちながら、現在まで、地区有数の農村地帯として発展してきた歴史がある。

本事業の実施主体は、地区内全戸を会員とする小山をよくする会である。

事務局を小山公民館に置き、地区内から選出された会長1人、副会長2人と、各集落の代表として選出された推進委員45人で話し合いを

行いながら、明るく豊かで住み良い地域づくりを目指して活動している。

2 現状と課題

小山地区は、大野市内でも有数の歴史を誇る地区である。

公民館の歴史講座を受講したことをきっかけに、平成18年頃に地域の歴史を学習するグループが生まれ、地域史の掘り起こし活動が行われてきた。

この活動をベースとして、平成22～29年度に実施された「結の故郷づくり交付金事業」を活用して、地域の歴史と文化を活用した地域づくり事業を展開した。

事業を実施するにあたり、次の二つを事業の柱とし、事業の実施方針とした。

1つは、地域の歴史や文化を掘り起こし、これを地区住民に知ってもらい、地域を誇りに思う住民意識の醸成を目的とした「歴史と文化の里づくり事業」である。

もう1つは、古くから米づくりなどの農作業により地域に受け継がれてきた「結の精神」を後世に承継していくことを目的とした「地域コミュニティ支援事業」である。地域住民が一丸となり、地域の課題を住民が知恵を出し合い協働で作業し解決するといった風土を継承していくために支援していくものである。

3 事業の内容

①歴史と文化の里づくり事業

小山地区のモットーである「愛汗喜働」という言葉とともに小山地区で継承される「小山鍬踊り」について、継承活動に役立てていくためのツールである紹介・解説するDVDを作成した。平成28年度に作成したDVDを複製し、関係機関や関係団体などに配布したことによって、昭和初期に小山村の吉田徳五郎村長が提唱

した農業振興施策の一環としての「農民魂」をより理解することができ、「小山鋤踊り」の継承活動につなげていくことができた。また、昔からの伝統芸能を大切に、地区を誇りに思う心が育まれた。

また、平成22年度に開催した地区歴史講座をきっかけに、地区内に新たな史跡（舌城跡）が発見され、歴史的に価値のある史跡を地域住民に知ってもらうため、舌城跡の遊歩道整備を実施してきたが、同様に隣にある茶臼山城も鎌倉時代に城として機能していたと伝えられており、この茶臼山城についても地域住民に史跡の存在を知ってもらい、地域の歴史に関心を持ってもらうため、気軽に散策できる遊歩道の整備を行った。小山地区の深い歴史を学び、ふるさとを誇りに思う郷土愛がさらに深まった。また、整備作業を協力して行うことで地域の団結力が高まりにもつながった。

地区の歴史の会とも合同で整備を行い、地域の歴史を知り、興味を持ち、地域を誇りに思う意識が芽生えつつあると言える。

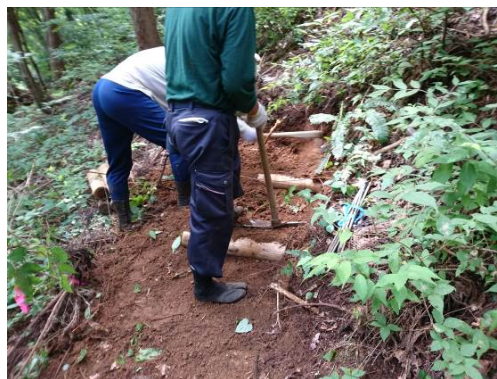
平成29年度茶臼山城跡の史跡整備

御城山（上舌地係）の茶臼山城について地域住民に史跡の存在を知ってもらい、地域の歴史に関心をもってもらうため、気軽に散策できる遊歩道の整備を行った。平成28年度までは隣の

北朝時代や戦国時代の重要な城の1つであることから整備を行った。



〈下草刈り作業〉



〈階段作成作業〉



小山鉾踊りの番組のDVD複製

小山地区の継承される「小山鉾踊り」を映像で紹介・解説する番組を制作した。そのDVDを複製し、小山地区内各区や市内各小中学校、図書館等関係機関に配布した。



②地域コミュニティ支援事業

集落が持つ課題を集落で話し合い、集落の力で解決していくこの事業を実施したことにより、集落の共助や絆の大切さを再認識することができた。

小山地区は、農作業など地域で協力する“結の精神”が受け継がれている地区である。しかしながら、農作業の機械化や就労環境の変化などに伴い、地域をあげた共同作業の機会が減少しつつあり、本事業で地域の課題を話し合い、共同作業により解決することは、“結の精神”を継承する上でおおいに役立ったと考える。

また、地域交流・世代間交流を目的に実施したキッズフェスタでは、昔ながらの食文化であるもちつき体験を通じて、子どもから高齢者までが楽しく交流するとともに、臼と杵でつくもちつきを継承していくきっかけになった。

小山地区地域づくり講演会では、地域づくりの講師として大学の教授を招き、ワークショップを通じて、自分たちで小山地区の魅力と可能性を探ることができた。

集落内ピオトープ芝植栽（上黒谷）
雪崩防護壁前集落道舗装（下黒谷）
ふれあい会館スロープ新設（鉾掛）
新規花壇造成（南春日野）
住民交流事業「キッズフェスタ」（実行委員会）
小山地区地域づくり講演会

毎年、提案された事業費総額が交付金予定額を上回るため、小山をよくする会推進委員会において交付金の配分額を決定した。

上黒谷地区ピオトープの芝植栽

上黒谷地区では、集落内にあるピオトープへ芝生を植栽する事業を実施した。雑草取り、山砂敷き、芝生張り、目串止めを集落の住民により実施した。

このことにより、集落内の住民が力を合わせて作業し、自分たちが住む住環境を美しく維持していくことで、失われつつある共同作業の大切さを実感する機会が生まれた。

集落内の住民が集いおしゃべりをし、住民交流する場所として利用されている。



下黒谷地区雪崩防護壁管理道路コンクリート舗装

下黒谷地区にある平成8年に設置された雪崩防護壁には集落の平穏無事を祈願した観音像レ

リーフが飾られている。

近年、テレビ番組で紹介されたことから注目が集まり、市内外からここを訪れる人も多くなってきたことから、雪崩防護壁の脇の管理道路をコンクリート舗装することとした。

全長約450mであることから、4年間をかけて継続的に実施することが集落内で話し合われた。

今年は、約50mのコンクリート舗装が完了した。



鉦掛地区ふれあい会館スロープ新設

鉦掛地区では、集落住民で話し合いを持った結果、集落のふれあい会館にスロープを新設する整備をすることとした。

高齢者が安全に歩行できるよう長さ3.5mの手すりを設置する。

今回の整備で、鉦掛サロンの活動等で年配者の参加率が高くなることが期待できる。また、転倒予防にもなる。



南春日野地区の新規花壇造成

南春日野地区では、町内の土地を借用し花壇を新設することとした。地区民全員で管理運営を行うことで、住民のコミュニケーションをとることができるようになる。また、旧地区民と新居住者との相互理解をはかることができる。年配者と子ども達との面識も増え、見守り隊の意識も出てくる。



キッズフェスタの様様

小山公民館で活動するグループの有志により結成されたキッズフェスタ実行委員会により、地区全体の交流、世代を越えた交流の機会として、キッズフェスタが今年度も継続して開催された。うすと杵を使った餅つきを子どもたちに体験させる内容とした。家庭での餅つき体験が少なくなりつつある中、子どもたちに餅つきを体験させる良い機会となった。また、地域に住む餅つき熟練者を招き指導してもらったことで、世代間の交流も生まれ、地域の絆が深まったイベントとなった。

さらには、地域の壮年団体「小山一龍の会」のメンバーも参加、子どもがいない世帯からの参加もあり、イベントを通しての人と人とのつながりが広がりを見せている。

継続して開催していることから、住民への認知度も高まり、参加者の増加も期待している。

毎回、参加者からは大変な好評価を得ている。



小山地区地域づくり講演会

子どもたちの住みやすい地域にしていくため、また、お年寄りの住みやすい地域にしていくためにということをも目的に、これからの「小山」をよくしていくために勉強会を行い、地区住民とともに地域づくりの学習機会を持った。また、ワークショップを行うことによって自分の地域の魅力に気が付くとともに、自分の地区の可能性をさぐることができた。



4 事業の成果

①歴史と文化の里づくり事業

- 平成28年度に作られた「小山鉾踊り」解説DVDを地区内外に配布した。地区でモットーとしている「愛汗喜働」という言葉と共に「小山鉾踊り」を継承していく活動につなげることができ、地区を誇りに思う意識が醸成された。また、地区外の関係者等に配布することによって「小山鉾踊り」を知らしめることができた。
- 小山地区にある旧跡の存在が広く住民に周知してきており、舌城とともに茶臼山城の整備を行うことにより、小山地区の深い歴史を学び、地区を知り、地区を学び、ふるさとを誇りに思う郷土愛を深めることができた。また、整備作業を協力して行うことで地域の団結力が高まった。

②地域コミュニティ支援事業

- 地域の課題を話し合い、共同作業を実施することで、共助の精神“結の精神”が継承されるきっかけとなった。
- 地域住民の交流により絆が深まった。
- 小山地区の課題と魅力に気づき、これからの小山地区の可能性を探ることができた。

5 今後の展望

今年で8年目となる本事業を継続実施してきたことで、各種行事や作業に参加した人を中心に、地域を誇りに思う住民が徐々に増えてきた。

新たに、地区の資源を生かした活動ができないかと模索する地区民も出てきており、地区の活性化についてさらなる展開が期待できる。

小山鉾踊りの紹介番組を作成し、関係者にDVDを配布したことによって、地区に受け継がれてきている、汗を流して、働いて、喜ぶという「愛汗喜働」の精神を今一度見つめなおすことができた。

今後、歴史と文化の里づくり事業においては、埋もれている地区内の歴史の掘り起しに力を入れるとともに、これまでの取り組みを見つめなおすことも重要である。さらに、掘り起こした歴史や伝統文化などを地区住民に広げていくことが課題である。

また、地域コミュニティ助成事業については、事業の目的としている“結の精神”の継承を図るため、事業を継続していく必要がある。キッズフェスタについては、近年騒がれている餅つき中毒に十分気をつけるとともに臼と杵を使った昔からの食文化体験を大切にしていきたい。

農作業の歴史が作り上げた助け合い、協力する精神を今後も継承するためには、継続した取り組みが必要である。

地域活動が活性化し、地域を誇りに思う意識や機運がより高まるよう、小山をよくする会として、今後も粘り強く地域づくりに取り組んで行きたいと考えている。

上庄をよくするつどい

1 基本データ

- 地区名 上庄地区
- 地区人口 3, 801人
- 地区世帯数 1, 120世帯
(H30.1.1現在)
- 地区面積 約262.3km²
- 地区の沿革

上庄地区は、32の集落（行政区）で構成されており、地勢的には市街地南部に位置し、日本百名山の1つ荒島岳のふもとで、東西約6^{km}、南北約12^{km}ほどの広さを有している。地域は、一級河川の真名川と清滝川が作り出した扇状地形で、稲作とサトイモの生産が盛んな農村地区となっている。



- 実施主体 上庄をよくするつどい

2 現状と課題

地区の特性として、学校区が当地区と同じであり、保育園、幼稚園、小学校、中学校がそれぞれ1園（校）ずつであること、また、以前JAが単独で存続していたことなどから他地区にはない地域の特異性や地域の繋がりがあり、郷土愛も強い。

しかしながら、人口の微減、少子高齢化は同地区も少しずつ進んできており、各集落の活力や地域全体の活力も停滞化してきている。

こうしたことから、平成24年度から、当地区では、地域住民自らが地域を今一度見つめ直し、地区の伝承や文化を再認識しその価値と魅力を高めようと、地域の活性化や賑わいづくりに繋がるような事業に取り組むこととし、麻那姫伝説継承事業に取り組んでいる。

平成24年度は麻那姫音頭の復活や麻那姫像の展示庫設置に取り組み、平成25年度は、麻那姫感謝祭の開催をはじめ、伝説の紙芝居作成、また、ヨサコイ麻那姫の作成など、麻那姫伝説に纏わる多様な事業に取り組み、地区住民への周知と継承の意識付けを図った。平成26年度は、この麻那姫伝説継承事業を継続し、地域の賑わいと区民の絆を深め、地域の活性化を図るため、麻那姫感謝祭の継続や麻那姫街道の案内看板設置などに取り組んだ。平成27年度は麻那姫感謝祭やスポーツ等のイベントを更に盛大とするため、キャラクター「まなちゃん」の着ぐるみやスポーツ横断幕を整備した。平成28年度はキャラクター入りのハッピー等を購入・着用し、麻那姫感謝祭の踊りの輪を広げ、また、マスコットをデザインしたのぼりを購入し、今後、各種スポーツイベントを盛り上げた。さらに、麻那姫広場に土を盛り、シバザクラを植栽するなど、地域の賑わいの創出に寄与した。

3 事業の内容

麻那姫伝説継承事業は、平成29年度で5年目となり、地区住民には、定着しつつあり、各種広報により伝説の周知などが図れてきた。

本年度は、上庄踊り振興会を立ち上げて、麻那姫音頭等の普及に努め、また、地区の史跡である小山城跡地を散策できるよう遊歩道等の設置に取り掛かった。

昨年度同様、各種団体連絡協議会や実行委員会を立ち上げ、以下の事業に取り組んだ。

(1) 麻那姫感謝祭の開催

日 時：10月1日（日）

午前10時30分から

（敬老会との同時開催）

参加者：1,211人

麻那姫伝説を後世に継承し、麻那姫の遺徳を讃え、秋の収穫に感謝するため、5年目となる麻那姫感謝祭を実施した。

平成29年度も、6月から実行委員会を立ち上げ、具体的な事業内容を検討していった。感謝祭当日は地区敬老会も同時開催されることもあり、携わるスタッフが両事業を共有できるよう合同実行委員会を立ち上げた。また、詳細な内容や部門別に検討をしていくための運営委員会や専門部会も立ち上げ、当日までに会議のほか、祭の準備として、のぼりの設置など多くの作業に取り組んだ。



麻那姫感謝祭のもよう

(2) 上庄踊り振興会の立ち上げ

麻那姫音頭の普及を進めるため、踊り好きのメンバーを集めて、上庄踊り振興会を立ち上げた。上庄公民館において、月1～2回稽古し、各々がこの踊りを指導できるようにした。このメンバーが、上庄夏まつりや麻那姫感謝祭の実行委員に教え、これらの催事にお

いて見本を見せ、踊りの輪を先導して作り、麻那姫音頭を広めた。



上庄踊り振興会による夏まつりの踊り先導

(3) まなちゃん（麻那姫）の知名度の向上

マスコットの着ぐるみ・まなちゃんを、様々なイベントに参加させることで、麻那姫及びその伝説を広く知ってもらった。一例としては、恒例となる保育園児によるマラソン大会の応援に駆け付けた。



まなちゃんによるマラソン応援

(4) 麻那姫の横断幕等によるスポーツ振興

子どもたちに愛される麻那姫の意匠入りの横断幕やパンチングバルーンにより、各種スポーツイベントを盛り上げた。上庄地区は、スポーツが盛んな地区であり、上庄地区壮年団体連絡

協議会等による結の故郷親善スポーツ大会や、上庄小学校の麻那姫マラソン大会などで活用した。



横断幕等によるスポーツ振興

(5) 小山城跡地の遊歩道整備

上庄地区には史跡である小山城跡地（通称・城山）があり、これを地域の資源として生かすため、平成29年度から遊歩道を設置することとした。設置により、地区内外から人を呼び込み、地域をさらに活性化していく。

なお、平成30年度も引き続き整備を行う。



丸太製の階段を設置

4 事業の成果

6年間継続して麻那姫伝説継承事業に取り組んだことで、上庄地区に住んでいながら麻那姫伝説を知らなかった人も、事業に参加すること

により、事業の意義と伝説を継承していくという意識付けができたと思われる。麻那姫感謝祭は年々内容を充実させ、地区内の来場者で賑わい、住民同士の交流の場を提供することが出来た。

また、感謝祭以外の各種イベントにおいてもキャラクターを用いた着ぐるみやバルーンなどを活用し、麻那姫伝説の周知による継承ができるようになった。

年間を通じて麻那姫伝説を継承することで、地区の子どもからお年寄りまでが関わりを持ち、触れることができ、地元上庄を愛する気持ちと誇りに思う意識が芽生えたのではないかとと思われる。

5 今後の展望

今後は、麻那姫及びその伝説をさらに普及させることで、来館者を増やしていき、地域内の活性化はもとより、地域外からも来場してもらえるよう取り組む必要がある。

子どもたちが上庄地区に愛着を持ち、将来はこの地に住み続けたいとなるよう、これからも地区住民が協力し事業を実施していけるよう地域内の各界各層の団体が連携し取り組んでいく。

富田地区むらづくり運動推進協議会

1 基本データ

- (1) 地区名 富田地区
- (2) 地区人口 3, 050人
- (3) 地区世帯数 909世帯 (H30.1.1 現在)
- (4) 面積 21.7k㎡
- (5) 地区の沿革

富田地区は、東は九頭竜川、西は真名川の二大河川に挟まれ、日本百名山に数えられる荒島岳のふもとから、東西約4km南北約7kmに細長く広がる純農村地帯である。

(6) 実施主体

富田地区むらづくり運動推進協議会



2 現状と課題

富田地区むらづくり運動推進協議会では、市民憲章を基調とし、富田地区の将来にわたって明るく豊かな地域の実現を図るため、地区住民が、自らの手による活気ある地域づくりの推進に努めている。

しかしながら、近年は、本協議会を構成する地区内の各種団体の活動自体が低迷・衰退しており、中には団体が解散したり、実質の活動が休止になっているものもあり、併せて、本協議会の中心となる各集落から選出される

「集落推進員」も地域活動への参画意欲の低下が見受けられ、本協議会の活動も、「花いっぱい運動」等の環境美化作業や「とみた夏まつり」以外には特筆すべき地域づくりの活動も見られず、協議会もそれらの運営に終始し、イベント終了後には活動が低調になっており、新たな地域づくりの方策を模索しているところである。

一方で、各集落においては、区長を中心として様々な地域づくりに関する活動が行われているが、この活動も、人口減少や高齢化の進行に伴い徐々に低下しており、地域コミュニティの衰退を招いている状況にある。



とみた夏まつり「みんなで踊ろう大野音頭」

3 事業の内容

【平成29年度の取り組み】

「地域資源を生かした地域住民による地域づくり交流事業」

実施行政区：蕨生区

「コミュニティ施設維持管理事業」

実施行政区：富嶋区、土布子区、下唯野区

森目区、上野区

平成29年度は、昨年を引き続き、それぞれが抱える問題を住民自らが解決する協働作業に対して支援をする「地域コミュニティ活動支援事業」を継続することとし、区民の安全な生活や利便性の向上、集落活動の活性化を目的とし、「地域資源を生かした地域住民による地域づく

り交流事業」に1集落が、また「コミュニティ施設維持管理事業」に5集落が取り組むこととなった。

①地域資源を生かした地域住民による地域づくり交流事業

(実施行政区) 蕨生区

(実施内容)

・地域資源（日本百名山荒島岳山開き等）を活かした事業で地区民参加による「おもてなしの心」により交流人口の増加を図った。

当地区高砂クラブをはじめ地区住民等の潜在能力の発揮による「舞台催事」と「おふくろの味」により地区民をはじめ登山愛好家を「おもてなしの心」でお迎えし、地区民と地区外から訪れた人達との交流を図り、もって地区のにぎわいの創出を図ることができた。



おふくろの味によるおもてなし



にぎわう会場の様子



山開きの神事



地区の子供達のステージ

②コミュニティ施設維持管理事業（その1）

(実施行政区) 富嶋区

(実施内容)

・富嶋集落センターには、これまで自転車や自動車を停める場所がなく、センターの横や、道路脇などに無秩序に停められていたが、集会センター南側の広場の一部を駐車場、駐輪場として整備することで、車輛が停め易くなり利便性や安全性が高まり、地域コミュニティ施設の環境整備が図れた。

その上を通る排水用U字溝も機能を満たしていない状況であったことから、改修することにより安全性の確保と排水機能の復旧が図られ、環境衛生の向上に繋がった。



重機を借り上げすき取り作業



整備前



コンクリート打設作業



補修作業の様子



整備完了



整備完了

③コミュニティ施設維持管理事業（その2）

（実施行政区） 土布子区

（実施内容）

- ・集落のごみステーション裏の石垣が経年劣化により破損が著しく、危険な状態であり、

④コミュニティ施設維持管理事業（その3）

（実施行政区） 下唯野区

（実施内容）

- ・集落センター周りにコンクリートを打設することにより、草刈等の維持管理の軽減と景観の美化を図り、もって区民の利用を推進し、地域コミュニティを促進する環境を整えた。



整備前



コンクリート打設作業



整備完了

⑤コミュニティ施設維持管理事業（その4）
 （実施行政区） 森目区
 （実施内容）

- ・これまで集落センターの裏へ周る時や清掃等の際、足元の悪いところを歩くため、躓いたり靴が汚れるなどの不便を伴っていたため、センター周りにコンクリートを打設することにより安全性、利便性が高まり、地区民の利用を促進し地域コミュニティを促すための環境が整備された。



整備前



整備後

⑥コミュニティ施設維持管理事業（その5）
 （実施行政区） 上野区
 （実施内容）

- ・当区において「日上がり公園」として古くから親しまれてきた公園では、桜が植えられ桜祭りなどのイベントも催されているが、そこへ通じる遊歩道が未舗装であり、草が生い茂るため、年に2回以上除草作業が必要であり、足元も悪い状況であった。今回アスファルト舗装をすることにより、維持管理の軽減と区民の利用推進が図られ、地域コミュニティの向上を推進する環境整備がなされた。



整備前の除草作業の様子



整地作業



舗装作業



整備後

4 事業の成果

少子高齢化が進み、各集落から若い人を中心に人口の流出が続いており、それに起因し、これまで実施されていた集落活動が年々低下しており、区内に設置されている広場等のコミュニティ施設も子どもの減少等により、その利用が減ったり、利便性が悪いことから使用頻度が少なくなり、その結果、雑草が生い茂ったりし、次に、その維持管理の負担が大きくなるという悪循環が発生している。

また、地域コミュニティの希薄化も進んできており、地域活動の低下にも繋がっている。

平成28、29年度の取り組みは、主に各集落で課題になっていることを住民自らが協働作業によりそれを解決する、地域コミュニティ活動の支援であり、2年間で地区内18集落の内、10集落が実施した。

10集落は、それぞれの課題やその解決策を地域で話し合い、実施することにより、区民の生活の利便性の向上や安全な地域活動の確保、また、これまでの維持管理等の負担軽減を図ると共に地域コミュニティを深める環境整備が図られた。

さらに1集落では、今年度地域の活性化を図るべく、地域の魅力発信やPRを兼ねた事業として地域資源を活かした地区民参加による事業を展開し交流人口の増加を図った。

これらの取り組みを通して、自らが考え、行う地域づくりの大切さと地域コミュニティ向上の重要性が再認識できた。

5 今後の展望

昨年と今年度で11集落の取り組みがあったため、本事業が継続している間に、地区内全集落が取り組むように働きかけていく。

なお、施設等の利便性を向上し、環境整備を

実施したものへの積極的な利用や活用による地域コミュニティの向上と自主的で継続的な地域活動の取り組みを期待したい。

また、この2年間は、各集落が所有する広場や集落センター周辺、その敷地の再整備等を行う事業が多かったが、次年度は、地域の活性化に資する新たな取り組みがなされることが望まれる。これにより、希薄となってきたコミュニティの醸成がはかられ、引いては富田地区全体の活力に繋がっていくことに期待したい。

食育のふるさと阪谷をよくする会

1 基本データ

- 地区名 阪谷地区
- 地区人口 1, 390人 (H30.1.1 現在)
- 世帯数 452世帯
- 面積 約31.2km²

阪谷地区は大野市の北東部、白山山系の経ヶ岳の麓に位置し、西は九頭竜川を挟んで富田地区、北は勝山市、東は五箇地区に接している。

集落は18。昭和29年の町村合併により、阪谷村が大野市となる。

標高250m～500mの中山間地域で、大野市の中でも雪が多い地区で、面積の3分の2は山林であり、農地は圃場整備が進み広大な棚田となっている。

六呂師高原には、広さ220ヘクタールの奥越高原牧場、自然保護センター、青少年自然の家等の県の施設やミルク工房奥越前等の市の施設を有する。

- 実施主体 食育のふるさと阪谷をよくする会

2 現状と課題

■人口減少

阪谷地区の人口は、最近4年の状況を見ると年間約40人ずつ減少している。地区の高齢化率は大野市平均を上回っており、自然減少はこしばらく高い割合で続いていくと思われる。そのような中、人口減少による地域力(ヒト・モノ・カネ)の低下を補う手段として、地域内へ人を呼び込み、交流入口を増やすことが、地域力回復のキーワードになってくると思われる。

■交流人口が増大する可能性

六呂師スキー場跡地の整理がついた事を契機に、平成27年10月に県、市、関係団体等で構成される六呂師高原活性化推進協議会が発足し、六呂師高原の再開発に向けて動き出し、平成28年度から県、市によるハード・ソフト両面による整備が行われることとなった。県は、平成29年の六呂師全体の入込目標を平成26年の11万6千人から約7万人多い18万人と設定している。また、中部縦貫自動車道

永平寺大野道路が平成28年度中に開通し、大野油坂道路も8年後に開通する見込みとなっている。また、道の駅「(仮称)結の故郷」の整備を平成32年度の供用を目標に進められることとなっている。

さらに、平成30年度に開催される福井しあわせ元気国体では、自転車ロードレースのコースの大半が阪谷地区を通ることとなっており、観戦者や応援者が多数阪谷地区を訪れることが予想される。これらのことを交流入口の拡大と地域力の回復につなげるチャンスと捉える。

■点在する観光施設の連携

六呂師高原を抱える風光明媚な当地区内には、「六呂師高原スキーパーク」、農業体験やそばうち体験ができる「スターランドさかだに」をはじめ、「ミルク工房奥越前」、「福井県自然保護センター」等多くの体験施設、観光施設が立地している。この施設を結び付けたエコツーリズムが地区の活性化のキーポイントになってくると思われる。

そのためには、地区内各施設の連携と外部の人との交流に対する意識の啓発と魅力的な体験プログラムの開発が必要である。

■課題

このような交流人口が増大する可能性と恵まれた立地条件を生かすためにも、安心安全な「有機の里」として他地区との差別化が重要であり、いかに交流入口を増やす仕組みをつくるか、また地区住民の「おもてなし」の意識をどのように醸成していくかが今後の課題である。

3 事業の内容

【交流人口の拡大による地域活性化を図る。】

【「食と農と文化の里づくり」で地域活性化を図る。】

【さまざまな事業を通して、地域の人材育成とふるさと意識の醸成による地域力の向上を図る。】

を基本目標とし、①雪まつりの開催、②収穫体験ツアー実施による情報発信、③農産物の加工品開発と販路拡大、④食育の祖ゆかりの地として食育の推進と啓発活動、⑤陶芸の魅力づく

りに取り組んだ。

①雪まつりの開催

ながーい雪のすべり台は、ちびっこ用のなだらかなコースとスピードが出る急なコースの2基設営した。急なコースには絶えず順番待ちの行列が出来ていた。

巨大かまくらは、直径約5メートル、高さ約4メートルの巨大かまくらを会場中央に設営した。

スノーシュー体験は、奥越前まんまるサイトの協力を得て、専門家による会場周辺の雪原や林間のツアーが実施できた。1日目約30名、2日目約70名の参加があった。

雪だるまづくりコーナーは会場内にたくさんの雪だるまができ、会場の雰囲気盛り上がった。

今回新しい企画として、六呂師高原青少年自然の家と協力し、会場内でもりのろくちゃんスタンプラリーを実施した。小さい子供を連れた家族連れに好評の企画であった。

阪谷のこだわり野菜の大なべを一日200食限定で振る舞い、両日ともあっという間に無くなってしまった。

阪谷の食のお店コーナーでは、カレーライス、からあげ、ぜんざい、おそば、おもち、飲み物などを販売し、カレーライス、からあげはすぐに売り切れた。

また、地元農産物を加工販売する2グループも出店し、おやき、笹寿司、おにぎり、あまざけ、おしるこ、コーヒー、お菓子類を販売し、盛況であった。

今回、新しく、地元のグループに声を掛けて、屋外にてとんちゃんなどの販売を行い、日曜日はいくつもの商品が完売した。

冬期間に親子連れで気軽に楽しめるイベントを実施しようと、地元住民が主体的に立ち上がり、何度も実行委員会や打ち合わせを重ねて企画してきたが、天候不順での積雪不足により開催が危ぶまれたが、恵みの雪が降り無事に開催できた。積雪の量も昨年を上回る量があり、会場設営も当初予定していた内容を行うこと

ができた。

豪雪地域においてやっかいものの雪を、観光資源、地域資源ととらえ、地元の核となる施設であるスターランドさかだにを活用して実施でき、2日間で500人近い来場者があり、イベントの部、グルメの部とも非常に賑わい、多数の交流人口の増加が図られた。

準備からイベント当日の運営まで、食事メニューの仕込みやすべり台のコース整備など、地区民あげてイベントを実施し、地域住民の交流も深まり地域力の向上につながった。



②収穫体験ツアー実施による情報発信

有機の里阪谷の魅力を体感できる体験ツアーとして10月に「阪谷の魅力!体験ツアー」と題して、日帰りのモデルコースを企画した。

これは、阪谷地区のPRと交流人口拡大を狙った事業である。

企画内容は、・大きな岩めぐり、・そば打ち体験、・野菜収穫体験、・陶芸体験といった体験メニューを取り入れたコースとし、新聞広告で参加者を募った。この中でも、野菜収穫体験、陶芸体験を新たな企画として位置付けた。

しかし、募集開始から1週間経過しても参加者は2名どまりであり、今後も増える見込みがないことが予想されたので、残念ながら実施を断念した。

この体験ツアーは、阪谷地区が持つ観光資源等、お客を呼べる素材が何かと言う観点でのパイロット事業として実施を狙ったが、残念ながら反応が無く失敗に終わった感がある。企画にいろいろな物を詰め込みすぎて、方向性が広がりすぎてしまったのが、逆に参加に結びつかな

かったかもしれないので、体験メニューの方向性をもう少し絞った方が良かったかもしれない。

③農産物の加工品の開発と販路開拓

加工品の開発については、さかだに特産工房が、加工技術の向上、新商品の開発および販路開拓を目標に活動を進めてきた。

平成28年度に栽培した雪の下人参を収穫し、ジャムに加工してみたところ、大変新鮮でおいしかったため、この雪の下人参のジャムの商品化に挑戦した。

掘った人参をよく水洗いしてから蒸し、細かく刻んでから煮詰めた。そうしてできたジャムを瓶詰し、煮沸して殺菌減圧するため、「缶詰又は瓶詰食品製造業」の営業許可を取得し、加工技術の向上に努めた。

そういった中で、大野市雇用創造推進協議会が土産品を開発するので参加しないかという誘いがあり、試食をしてもらったところ好評であったので、「ふふふおおの」ブランドの土産品リストに加えてもらう事ができたため、商品化への動きが加速した。

販路としては、ふふふおおのブランドとして、北陸自動車道北鯖江PA、ハピリン福福館、平成大野屋結楽座および阪谷地区内にある喫茶ひまわりで販売することとなった。

さらなる知名度アップと販路拡大を狙い、イベントなどでアピールするためののぼり旗などを作成するとともに、他の商品を含めた総合リーフレットを作成した。

④食育の祖「石塚左玄」ゆかりの地啓発活動

食育の祖「石塚左玄」の先祖の墓所が、阪谷地区（萩ヶ野区）にあることから、阪谷地区で石塚左玄が唱えた『食育』を広めていこうと石塚左玄の訓えに基づいた料理教室を年3回開催した。有機肥料を使い、化学肥料や農薬を使わない阪谷産農産物をおいしく食べる方法や食育の祖「石塚左玄」の訓を通して、「食育」の重要性を地区内外に広めることができた。



⑤陶芸の魅力づくり

自主グループ「越前おおの阪谷桃木窯」を中心に、毎月第1・3木曜日に中村鐵遷氏（勝山市在住）を講師に招き陶芸教室を開催した。

陶芸教室では、手捻りによる作陶技術を習い、受講者の技術がさらに向上した。

陶芸の魅力づくりについては、拠点施設がかなり整備されたことから、陶芸が当地区における観光体験プログラムの一つとして実施できるよう、関係者と協議をし、体験ツアー（前述）の一つのメニューとして企画出来たが、残念ながら申込者少数の為実施に至らなかったため、今後も引き続き関係者と実施に向けて協議していきたい。



4 事業の成果

他地区に誇れるイベント、文化、産業を創造し、魅力的で元気な「ふるさと阪谷」を創出するため、交流人口の拡大と受け入れ態勢の充実を図り、おいしい食べ物、有機の里で作られた

農作物、陶芸文化のさらなる定着を阪谷地区全体の活性化に繋げ、また、様々な事業を通して地域リーダーを増やすことと阪谷をもっと好きになってくれる人を増やしたいという目標で、様々な事業を実施してきた。

具体的な事業としては、①雪まつりの開催、②収穫体験ツアー実施による情報発信、③農産物の加工品開発と販路拡大、④食育の祖ゆかりの地として食育の推進と啓発活動、⑤陶芸の魅力づくりを実施した。

① まつりの開催

冬期間に親子連れで気軽に楽しめるイベントを実施しようと、地元住民が主体的に立ち上がり、何度も実行委員会や打ち合わせを重ねて、この雪まつりをどのようなイベントにしたいのかという根本的な議論から、細かいイベントの企画、スタッフの配置などを議論してきた。

豪雪地域において、やっかいものの雪を観光資源、地域資源にとらえ、地元の核となる施設であるスターランドさかだにを活用して実施でき、2日間で500人近い来場者があり、イベントの部、グルメの部ともに賑わい、多数の交流人口の増加が図られた。

実行委員自らの協賛金募集活動、前日から行った食事メニューの仕込みやすべり台のコース整備、様々な部署のリーダーになった方のリーダーシップが随所にみられ、地区民が主体的にイベントを運営できたことにより、地域住民同士の交流がさらに深まり、このことで地域力の向上と地域の担い手となるリーダー育成につながったことが大きな収穫であった。さらに、多数の来場者を笑顔でお迎えし、このイベントを楽しんでもらおうという姿勢を持ったイベント運営ができたことにより、地区住民のおもてなしの意識の醸成に貢献できたことも大きな成果である。

②収穫体験ツアー実施による情報発信

本ツアーは、参加者少数の為、実施を断念したが、収穫体験、陶芸体験を新たに企画することができ、当地区において、収穫体験に協力いただける農家、陶芸体験に関われるスタッフを掘り起こすことが出来たのは成果であった。

③農産物の加工品開発と販路拡大

本事業には、さかだに特産工房が取り組んだが、昨年度本交付金を活用して栽培している雪の下人参の商品化に成功でき、大変有意義な成果となっている。

また、本商品は、北陸自動車道北鯖江PA、ハピリン福福館など市外に販路を設けることが出来た事により、地区外への情報発信にもつながっている。

④食育の祖ゆかりの地として食育の推進と啓発活動

本事業では、阪谷地区とゆかりがある偉人である、食育の祖「石塚左玄先生」の人となりを知らしめるために、石塚左玄先生の訓えに基づいた料理教室を開催した。この料理教室には阪谷産有機野菜を中心に使用しており、また、訓えの実践により、阪谷地区の食と農の発信と食育の重要性を広めることが出来た。

⑤陶芸の魅力づくり

阪谷地区における文化面での交流人口の拡大を図る手段として、「陶芸の魅力づくり」をキーワードに、越前おおの阪谷桃木窯グループと連携し、陶芸教室の実施を足掛かりに阪谷地区における陶芸文化の広がりや交流人口の拡大を図った。

大型の窯に続いて、小型の窯も整備できたことから、作陶から焼き上がりまでのサイクルの短縮につながられ、より一層手軽に陶芸体験が実施できる体制づくりが出来たことにより、阪谷小学校の総合活動授業にも作陶を取り入れてもらう事ができ、阪谷地区内で陶芸文化が確実に広がっていることが実感できた。

また、阪谷地区で採取された粘土での作陶も成功し、阪谷産粘土でのメイドイン阪谷産焼き物の製作も実現した。

5 今後の展望

「雪まつりの開催」については、本イベントの運営スタッフに、地区全住民の約1割近い人数が従事したが、従事スタッフにも高齢化の波が押し寄せてきているので、今後、このようなイベントに若い世代に出てもらえるか、いかに世代交代を図るか、さらなる自主性を発揮してもらえるか、これが地域イベントを存続していく上で大きな課題と感じた。

「収穫体験ツアーによる情報発信」においては、企画、広報宣伝、集客、ツアー実施と商業的な要素もある事から、企画から実施まで、関わる人材または実施主体について再考が必要かもしれない。

「農産物の加工品開発と販路拡大」においては、特産工房が前年に商品化した「乾燥野菜」シリーズに引き続き、雪の下人参ジャムの商品化に成功した。今後も本事業を活用し、地元農産物等を活用した商品開発に取り組んでもらい、阪谷地区の産業の創造と地域活性化に繋げ、このことで有機の里阪谷の農作物がブランド化することで、さらに需要が高まり、農業所得が少しでも高まることを期待したい。また、今後も、引き続き商談会や各種イベント、物産展に積極的に参加し、ブランド化を押し進める後押しをしたい。

「食育活動の推進」においては、食育の祖「石塚左玄」ゆかりの地として、地域や学校、関連団体と連携しながら、阪谷で採れた食材を味わえることの喜びや食育の重要性などを広く伝えていきたい。

「陶芸の魅力づくり」においては、拠点施設が整備されたの契機に、陶芸作りが観光体験プログラムの1つとして実施できるよう、さらに関係者と協議していきたい。

五箇地区むらづくり推進協議会

1 基本データ

- (1) 地区名 五箇地区
- (2) 地区人口 49人
- (3) 地区世帯数 28世帯
(H30. 1. 1 現在)
- (4) 地区面積 146k㎡
- (5) 地区の沿革

五箇地区は、上打波、下打波、東勝原、西勝原の4集落（行政区）で構成され、市街地から約8km東南の位置にあり、西は「日本百名山」の「荒島岳」、東は赤兎山と白山連峰、岐阜県に接し、面積は146k㎡と広大な林野を占める中山間地域である。



- (6) 実施主体
五箇地区むらづくり推進協議会

2 現状と課題

かつての五箇地区は、林業が栄えるととも

に、スキーやキャンプ、登山などのアウトドア・レジャーに、また、風光明媚な「刈込池」や「仏御前の滝」、九頭竜川の「魚止め」などを訪れる観光客が多く、民宿業（現在は1軒が営業）が盛んに行われ、一年を通じて賑わいの絶えない所であった。

しかし、相次ぐ災害やダム建設による移住、観光客ニーズの変化による観光業の低迷などから人口の流失と少子高齢化が進行し、それに伴い、小・中学校や郵便局、JAの支所が再編計画の中で順次廃止され、地域の活力は衰退していった。

現在は、JR勝原駅のある西勝原区を中心に、東勝原・上打波・下打波の4集落に29世帯55名が生活をしている。また、無雪期には、市街地から畑や山仕事に通う五箇地区出身者の姿も多く見られるとともに、神社では祭りが催されている。



また、本協議会が実施する「花いっぱい運動」により、JR勝原駅周辺を季節の花で飾り、五箇地区への訪問者を出迎えたり、近所の婦人によって30年ほど前から植樹された花桃並木が、春になると“桃源郷”として注目を集め、満開の季節には遠く中京や関西から観光客が訪れるまでになるなど、「豊かな自然を活かした交流」を目指して、地区住民が一体となり“ふるさと五箇”の活性化に向けて取り組んでいると

ころである。



3 事業の内容

平成22年度から3年間の「越前おおの地域づくり交付金事業」では、住民協働による故郷の環境保全と、交流人口の増加による地域の賑わいづくりをテーマとし、雑草が生い茂り、埋もれかけた湧水地や不法投棄されゴミに汚された用水路に階段や遊歩道を設け、来訪者が清流を楽しめる親水空間として再生した。さらに、“桃源郷”と表現される花桃並木を核に、地区全体に花が咲き誇る花木の里づくりにも取り組んだ。

また、五箇公民館の北側、花桃並木に続く西勝原区の共有地は、地区住民や五箇地区に縁のある人たちによって植樹された花桃やツツジ、ヤマボウシのほか、花壇には季節の花が咲き誇り、来訪者が五箇の自然を楽しめる園地の整備を図っている。特に、4月中旬からの桜、それに続いて花桃が満開を迎える5月上旬にかけては、大勢の見物人で賑わう。ことから、「越前おおの地域づくり交付金事業」を活用した環境整備を進めてきたところである。

平成25年度から3年間の「結の故郷づくり交付金事業」では、これまでの取り組みを継続しながら、園地の一層の充実と来訪者の利便性向上のため休憩施設（東屋）を設置することにした。



【花桃園地整備（H27）】

休憩施設（東屋）完成

また、平成27年度には、休憩施設（東屋）の完成にあわせて、花桃を地区内外に広く情報発信し、地区住民の連携と親睦を深めるとともに交流人口の増加による地域に賑わいを促進するとし、「五箇のお花見会」と銘うったイベントを開催した。



今年度も花桃イベント「五箇のお花見会」をさらに盛大に開催するため、駐車場の確保やそこから会場までのシャトルバスの運行、案内看板の充実、警備員の配置等を図ることにより、来訪者の利便性の向上に取り組むとともに、多彩なイベントを実施することにより、地域の賑わいを創出した。

花桃イベント開催事業「五箇のお花見会」

開催日：平成29年4月23日（日）

例年は桜が散ってからの花桃だったが、今年は桜と花桃が同時に咲くという珍しい状況となった。4月23日（日）には、以前に開催していた「お花見茶屋」やその後、試行的に取り組んだ「お花見会」イベントをさらにグレードアップし、「五箇のお花見会」として五箇地区を挙げての花桃イベントを開催した。

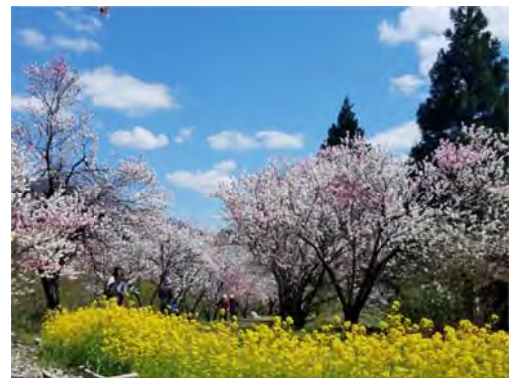
イベント当日は早朝から、地区住民をはじめ各団体等の協力を得て、会場設営を行い、10時のオープニングから、寄せ植えや花桃クラフトづくりなどの多彩な体験コーナー、食のコーナー、物販コーナー、ステージ発表などを開催した。

また、地区住民の手作りの「ふるまい鍋」のふるまいや、五箇地区に伝わる神子踊りが披露され、地区住民や五箇地区に縁のある方々、観光客など大勢の方に楽しんでいただき、終日賑

やかにイベントを開催することができた。



会場設営（ステージ設置）の様子



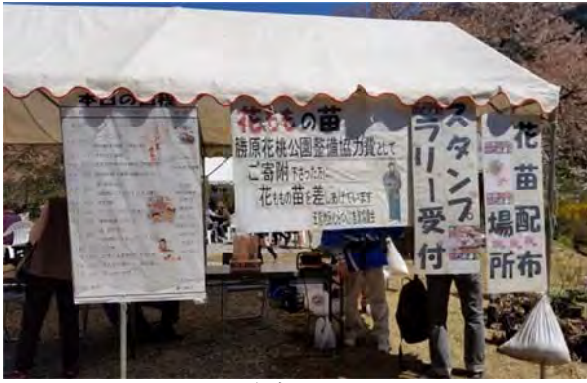
花いっぱいの中



桜の木の下で発表（大正琴）



旧カドハラスキー場駐車場から会場までシャトルバスを運行



本部テント



地唄舞のステージ



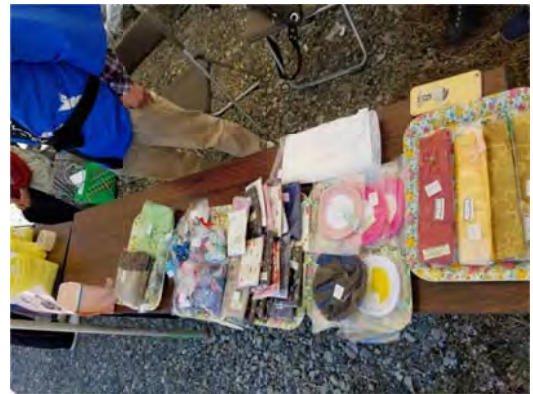
春の花の寄せ植え体験



食のコーナー



クラフト体験



物販コーナー



写真撮影体験



撮影ポイント・花桃ドレス



五箇地区に伝わる神子踊りの披露



神子踊り保存会による生唄



花桃苗の配布

4 事業の成果

近年、五箇地区の花桃並木は、テレビや新聞などで報道される機会が増え、県内外から見物に訪れる人が年々増加している。

花桃公園やその休憩施設は、地区住民が集う場となるだけでなく、市内の保育園や老人施設等の園外活動、県外からの花見客などが散策の合間に一息入れる休憩処となり、地区住民と訪

問者とが交流する拠点として活用されることが期待できる。

また、イベントの開催は、地区住民がさまざまな形で参加し、地区内の交流を深め、一体感を生み出す機会になるとともに、交流人口の増加は、地区の活性化に寄与するものである。

5 今後の展望

花桃公園の整備が完了し、それを活用したイベントの開催は、地区住民をはじめ、五箇に縁のある方々が、『五箇の良さ』を再認識する良い機会となり、また、多くの来訪者を受け入れることで、地区に賑わいを創造することができた。

人口減少や高齢化の進行による地域の減退を少しでも食い止めるため、今後も地区の“宝”である、花桃を核とした取組みを継続し、住民と来訪者が交流する機会や場を充実させていくことで、そこから生じる賑わいが“ふるさと五箇”の活力となることが期待される。

また、このイベントの開催だけではなく、公民館事業でも、寄せ植え体験講座や、花いっぱい運動、花桃の種植え体験講座等に取り組み、参加者に自然に親んでもらうとともに、花桃や花桃公園への関心を高めてもらう機会を提供するなど、情報発信に努め、さらなる交流人口の増加による地域の活性化を図る取組みを展開していきたい。



花いっぱい運動